

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭 故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府の發展性……………文學博士 矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

記事

財部教授逝く
故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戶正雄 本庄榮治郎 蜷川虎三
木村喜一郎 吳文炳 宗藤圭三
青盛和雄 松岡孝兒 石川興二
黒正巖 藤本幸太郎 谷口吉彦
岡崎文規

附錄

彙報

外國雜誌論題

故財部先生の追憶

吳文炳

大正五年頃と記憶して居ります。拙著「法制を中心

第五十一卷 二四三 第二號 一〇九

とせる江戸時代史論」が上梓されて間もなくのこと、或る日京都帝大圖書館から封書が届き右の書物一部大學圖書館に寄贈方依頼の趣が書かれてありました。そして傍に財部教授の御署名があつたと記憶します。その時私はこれが財部といふ先生の筆蹟かと暫の間見入つたのであります。其後大正七年に私の先考が亡くなつた際に先生から御弔詞に添へて亡父と山陰の水郷松江市に於て、嘗て統計講習會が開かれたとき同宿の旅館で種々語られたことが大層愉快な思出であつた旨が綴られてありました。今更先生の訃音に接して當時が思ひ出され感慨に堪へません。そのやうな關係から私は自然財部先生に接近する機會を得ましたが、殊に先生の御指導を忝うするやうになりましたのは大正の終り近くになつて私の學校生活が再び始まつてからのこととです。

先生は申さば純日本型の紳士でありました。

村夫子然たる風貌のうちに慈愛を包んだ上であり、滋味な中にも極めて派手を氣性があつたやうです。談

論風發ではないが、政治、宗教、藝術についても尠らず關心を持つて居られたやうです。眞如堂にお住ひの頃時折お訪ねすると喜んで下さつて、よく料亭につれて行かれ、其處で酒盃を重ねながら色々な話をされました。或る時伺つた日本畫の本領についてのお話を誠に面白く、明治、大正、昭和の日本畫を東山時代以來の發達期と指摘されながら痛烈な批評を遊ばしたことを忘れることは出来ません。然しその代り私などが餘りくだらぬことを質問したりすると何にも返事を爲さらぬので赤面することなどありました。けれども何處迄も見捨てないで指導して下さいました。

先生の話術は時々禪問答式になつて弱らされました。迂活に返事が出来ないばかりか、何のことか判断の出来兼ねる場合すらありました。此點では話術の巧拙を兎も角として故坪内逍遙先生のお話と一脈通するものがあつたやうに思はれます。先生は一面實に辛抱強い方でした。確か大正十三年でしたか奥様が御病氣で京大附屬病院に御入院中終始御心遣ひ、誠に他目にも有

難いと思ふばかりの御看護振りを目撃して感激に打たれ思はず頭が下つたことがあります。後に此點について故田島錦治先生からも同様のお話を承つたことがあります。

その田島先生には財部先生は大變私淑してゐらしたやうです。これは後に財部先生自身が仰せになつたのですが先生の御息の御婚儀のあつたとき、御披露の席上で田島先生が「同僚財部君の………」と仰せになつたと云つて自分達弟子筋の者に對して田島先生がこの御厚情と申されて後は無言の儘涙ぐまれたときは對座してゐる私も思はず眼頭が熱くなりました。私が財部先生のことを純日本型の紳士と稱したのは斯ういふ他目にも羨ましい謙讓、寛容、互助の美德を具へて居られたからであります。

私は昭和七年に京都帝國大學から名譽ある學位を受けることが出来ました。諸先生方の御指導御支援をいよいよいたことは茲に申上げる迄もないことで御座いますが、此間財部先生からは特に御指導と御鞭達とを受

けることの出来ましたことは肝に銘じて感謝致して居る次第です。奥様の亡き後の先生には随分と御氣苦勞をなさつたことであり、お淋しいことであつたやうと思ひます。殊に其後先生御自身にも御病氣を遊ばしたりしましたから御健康も大分損められたことでありましたらう。それにも拘らず何時も變らぬ御元氣を示されて居られました。今度突然の御逝去は洵に悲しい極みでありまして何と申上げてよいか言葉も御座いませぬ。追憶の想も纏まらぬやうな次第ですが、無理に思出の二三を綴つて先生在天の靈に捧げたいと存じます。